

犯罪被害者の被害感情低減のための方法

大学生の被害内容と精神的被害に対する対応と対処

上市秀雄¹・星野香那²(非会員)

(¹筑波大学大学院システム情報工学研究科・²筑波大学社会学類)

キーワード：犯罪不安，感情，個人差

Coping and support to decrease student crime victims' psychological damage

Hideo UEICHI¹ and Kana HOSHINO^{2#}

(¹Graduate School of Systems and Information Engineering, University of Tsukuba, ²College of Policy and Planning Sciences, University of Tsukuba)

Key words: fear of crime, emotion, individual differences

目的

平成 17 年における刑法犯の認知件数は 312 万 5,216 件で 犯罪にあふ確率は年間約 41 人に 1 人である(法務省法務総合研究所, 2006)。認知件数は戦後最多を記録した平成 14 年をピークに, 15 年以降 3 年連続して減少したが, なお高い水準にある。近年の犯罪情勢の悪化を背景に, 犯罪被害者や遺族に対する理解と支援の必要性が認識されるようになってきた。犯罪被害は, 怪我や財産の損失, 家族を失うといった直接的被害だけではなく, 精神的被害(ストレス, 自己非難, 不安感など)も生じる。精神的被害に関しては, 周囲の対応によって, ある程度癒すことができる。たとえば“被害者の話に耳を傾ける”, “自分自身を責める気持ちを軽減させる言葉をかける”, “いつもと同じように接する”などがある(大和田, 2003; 小西, 1996)。しかし先行研究では, 主に死別やトラウマになるような重大な被害にあった人たちを対象にしている。またネガティブな感情に対する個人的な対処に関しては, Stress coping (Lazarus & Folkman, 1991), 後悔対処(上市・楠見, 2004)などがあるが, 実際の犯罪被害者に対する有効性については検討されていない。よって本研究では, 我々が普段あうような犯罪被害を明らかにした上で, 周囲の対応が精神的な被害感情(自己非難や恐怖心・不安感)低減に及ぼす影響, および自分の対処が被害感情低減に及ぼす影響について検討する。

方法

調査対象者 首都圏の大学生 104 名(男性 54 名, 女性 50 名)。質問冊子を 2008 年 11 月に質問紙を配布回収した。

質問項目 犯罪被害の経験 “今までの犯罪被害の中で, 最もショックだったもの”について, 時期, 被害内容(自由記述)を回答させた。当時の被害感情 被害にあった当時の被害感情について, 5 段階評定(1: あてはまらない~5: あてはまる)で測定。“適切な行動をしてあげればよかったと, 自分自身に対して腹立たしく思う”, “自分を責めた”, “不安を感じた”, “ストレスを感じた”などの 10 項目。周囲の対応 大和田(2003), 小西(1996)を参考にして, 周囲の人たちの対応を測定する尺度を作成した。“被害現場にいた人たちが協力して, 犯人を捕まえようとしてくれた”, “家族・友人などが, 同情して慰めてくれた”など 8 項目を 5 段階評定させた。自分の対処 Lazarus & Folkman(1984)の情動焦点型対処(ネガティブな感情を気晴らしや気分転換などで解消させる)と問題焦点型対処(ストレスとなる問題そのものの解決を目指す)を参考にして作成。“被害にあったことに対して, 何か行動をおこさなくてはと思った”, “誰かに聞いてもらうことで気持ちの整理をつける”, “忘れようとした”など 17 項目。5 段階評定。今現在の被害感情 今現在の被害感情について測定。項目は当時の被害感情と同じ。

結果と考察

犯罪被害の内容と男女別人数 男性は最もショックだったものや被害の大きかった犯罪被害として, 金銭的被害(泥棒・盗難)をあげる傾向が高く(38 人), 女性は身体的被害(痴漢)をあげる傾向が高い(27 人)ことがわかった(Figure 1)。

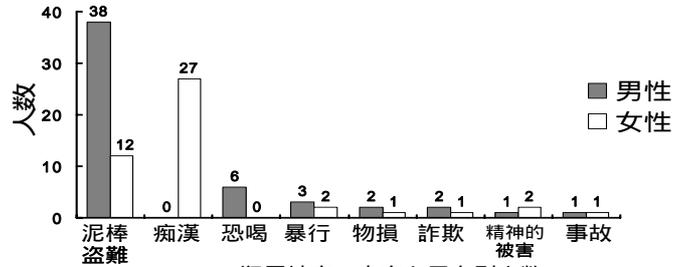


Figure 1 犯罪被害の内容と男女別人数

周囲の対応, 自分の対処が被害感情低減に及ぼす影響 回答数の多かった泥棒・盗難(男女両方)と痴漢(女性のみ)について分析した(各被害感情を従属変数とし, 2(各対応・対処項目: 高群, 低群) × 2(時間: 被害当時, 今現在)の繰返しのある分散分析)。以下に交互作用のあった結果を示す。周囲の対応 泥棒・盗難の場合, 周りの人が話を聞いてくれることで, 犯人に対する恐怖心や不安感が低減($F(1, 47)=18.52, p<.001$), 精神的サポートを受けることで, 恐怖心が低減($F(1, 45)=6.94, p<.05$), 痴漢の場合, 話を聞いてくれることで, ストレスが低減(Figure 2. $F(1, 25)=7.15, p<.05$), 慰めることで, 犯人に対する恐怖心や不安感が低減($F(1, 25)=4.60, p<.05$)することがわかった。自分の対処 泥棒・盗難の場合, 人に相談することで, 恐怖心が低減($F(1, 47)=8.98, p<.01$), 誰かに聞いてもらい気持ちの整理をつけることで, 犯人への恐怖心等が低減($F(1, 46)=5.00, p<.05$), 自分で犯人を捕まえようとする対処により, 適切な行動をすればよかったという後悔が低減($F(1, 47)=4.13, p<.05$), 痴漢の場合, 何らかの行動をおこそうとすることで, 恐怖心が低減($F(1, 25)=4.71, p<.05$), 何をしても無駄だと思わないことでストレスが低減($F(1, 25)=10.19, p<.01$)することがわかった。

まとめ 周りの人は, 被害者の話に耳を傾け, 罪責感を軽減させる言葉をかけるなどの対応をすること, 自分自身は, 人に話をして自分の気持ちの整理をすること, 被害回避のために何かしようとするのが重要であることがわかった。

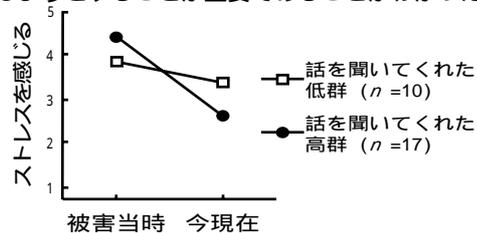


Figure 2 周囲の対応が被害感情低減に及ぼす影響

参考文献

- 法務省法務総合研究所(2006). 犯罪白書(平成 18 年版) 国立印刷局
 - 小西聖子(1996). 犯罪被害者の心の傷 白水社
 - Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. Springer Publishing Company, Inc., New York
 - 大和田 攝子(2003)犯罪被害者遺族の心理と支援に関する研究 風間書房
 - 上市秀雄・楠見孝(2004). 後悔の時間的変化と対処方法: 意思決定スタイルと行動選択との関連性 心理学研究, 74(6), 487-495.
- 本研究は, 平成 20 年度科学研究費補助金(課題番号: 19530553) 研究基盤(C)による助成を受けた。